

〔 最優秀賞 〕

藤田 佳奈子さん（秋田市）レビュー

書評対象図書

ヴィクトール・E・フランクル 著／池田 香代子 訳

『夜と霧【新版】』（みすず書房）

## 運命

死にたい、生きている意味がわからない。こころを病んだ人たちの話を聴く仕事をしていると、よくこのような悲痛な叫びを聴くことがある。そしてそのようなとき、私は、その悲痛な叫びの背景にある問題、生活環境、こころの病などを想像し、いくらかでもその苦痛に寄り添った、寄り添ってもらえていると思ってもらえるような対応、言葉がけを心がけている。

しかし、内心では私もわかっていない。なぜ生きなければならないのか。どうして生きることを選択しなければならないのか。苦しんでいる人たちに対し、自分が助言して差し上げられること、具体的に援助したり支援したりして差し上げられることなどごくわずかなことに限られているのに、自信をもって「生きた方がいい、生きなければいけない。」と言うことができない。私は話を聴くことを仕事とする者として、プロフェッショナルになれているだろうか。

本書は、この哲学史上永遠のテーマとも言えるだろう難解な問いに対して、一定の答えを示してくれている。すなわち、私たちはもう生きることを意味を問うことをやめ、私たち自身がその答えにならなければいけないのだ。＜生きるを体現し続ける＞ことが生きることなのである。

本書の著者は、第二次世界大戦時、アウシュヴィッツ強制収容所での生活を経験した。人間の命が番号で管理され、まるでゴミくずか何かのように、その生死を決められてしまうという恐怖を味わった。それまでの人生の背景や人間としての尊厳はまるごとないものとされ、過酷な労働を強いられ、劣悪な生活環境で息をしていることを強いられた。そして、そのような地獄の中にあっても、著者は心理学者かつ医師であることを諦めず、仲間の魂を生きること導いた。

著者の記録には、答えの出ない問題にこころを尽くして向き合い続けることの苦しさとともに、その尊さが描かれている。困難な状況や苦しい環境からは逃げたとしても、＜人間としての歩みを止めない＞ことの尊さが描かれている。

メンタルクリニックや精神科外来の予約が取りづらいほど、こころに不調をきたしている人たちが多い現代社会において、著者ならば、患者にどのような言葉をかけるのだろうか。

私は地獄を知らない。これからの人生でどのような困難に見舞われるかもわからない。しかし、本書に出逢えた私は予約の要らない精神科医に出逢えたと言える。この

運命に感謝したいと思う。